

天候に左右されない稲づくりの基本は土づくり

消費地から支持されるアルプス米産地確立のためには、天候に左右されない安定した強い稲づくりが必要です。その基本は土づくりです。土壌分析の結果から、管内の土壌は全体的にpHが低く、地力が低下しています。水稲作付け前に必要な養分を積極的に補給しましょう。

1 土づくり資材施用で強い稲づくり

アルカリ分は土壌の酸性を矯正し、養分吸収の向やカドミウムの吸収抑制に有効です。

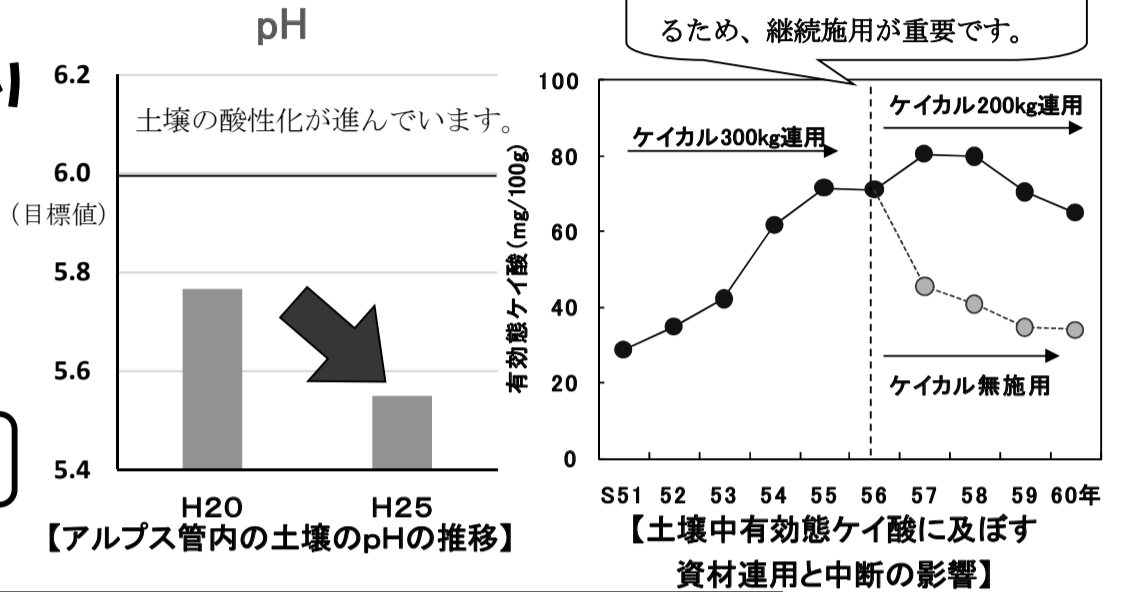
ケイ酸は、耐病性・耐倒伏性の向上、登熟歩合の向上、秋落ちの軽減に有効です。アルプス管内ではまだまだ不十分のため、土づくり資材を継続して散布する必要があります。

秋に施用していない圃場は、必ず施用しましょう。

【土づくり資材の施用量の目安と成分量】

資材名	10a 当たり施用量	保証成分(%)				含有成分(%)	
		アルカリ分	ケイ酸分	苦土	リン酸	鉄	有機
粒状ケイカル	200kg	44.0	30.0	3.0	—	—	—
元気	100kg	32.0	24.0	3.0	1.5	1.0	15.0
シリカロマン	100kg	45.0	25.0	7.0	5.0	5.0	—
シンキョーライトP	100kg	—	(66.1)	0.3	0.1	2.6	—
苦土重焼燐 30	20kg	—	—	4.5	30.0	—	—

苦土重焼燐30は、粒状ケイカル、元気、シリカロマンと一緒に、使用しましょう。



2 有機物で地力をつける

堆肥等の有機物を施用することで、土壌中の腐植やカリ等を増やします。また、土壌の保水性や通気性を良くし、肥効を持続させる効果があります。

積極的に“堆肥の施用”や“地力増進作物の栽培”を行いましょ。

JAアルプスでは、土づくり資材の散布作業の受託、それに伴う散布機の購入に対して支援します。
詳しくは、お近くの営農経済センターへ

【堆肥施用の目安(10a 当たり施用量・春施用の場合)】

牛ふん堆肥	豚ふん堆肥	発酵鶏ふん	糶がら堆肥
1～2t	0.5～1t	75～100kg	1～2t

※堆肥を春施用した場合、基肥N成分量を1～2kg減肥してください。

【地力増進作物の栽培(夏作物)】

作物名	播種時期	播種量	基肥	すき込み時期
クロタリヤ	6月～8月上旬	5～6kg/10a	不要	播種後50～70日後
ソルゴー	6月～8月上旬	5～6kg/10a	4kg/10a	播種後60～70日後

3 深耕して根域を拡大

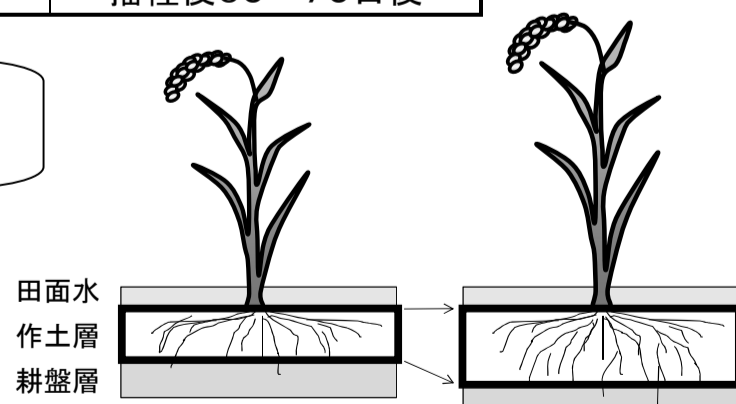
① 作土層拡大の効果

作土層が深いと根域が拡大し、気象変動の影響を受けにくくなります。

② 深耕の方法

トラクターの速度を落として作土層15cm以上を確保しましょう。また、プラウやスタブルカルチ等を利用し、「現状プラス3cm」をめざしましょう。

秋に耕せなかった方は、春に丁寧に耕しましょう！



作土深の確保で根域拡大

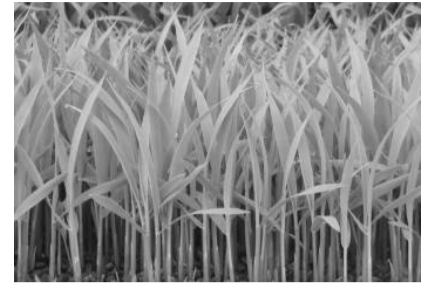
★春の農作業安全運動実施(4/1～5/31) 焦らず・急がず・落ち着いて、基本操作や安全確認を徹底し、転落・転倒・巻き込まれなどによる農作業中の事故をなくしましょう

★生産履歴の記帳と適正農業管理(GAP)に取り組み、「安全・安心」な米づくりを進めましょう

高品質・良食味なアルプス米の生産は、健苗の育成から！

苗質の良し悪しは、苗の活着や初期分けつの確保に大きく影響します！

高品質で美味しい米を生産するには、「健苗」を育てることが重要です。「5月15日」を中心としたコシヒカリの田植えに備え、「育苗日数20日間以内」を目安に、田植時期に応じて計画的な育苗作業に取り組みましょう。



1 コシヒカリの育苗計画

【田植予定日に合わせた育苗計画の目安(中山間地を除く)】

- ・田植予定日に合わせた育苗計画を立て、育苗日数が長くならないよう注意しましょう。
- ・栽植密度70株/坪を基本に必要な箱数を準備しましょう。

田植予定日	浸種	催芽	播種	育苗日数
5/10	4/8 頃	4/17 頃	4/18 頃	22 日間
5/15	4/16 頃	4/24 頃	4/25 頃	20 日間

※育苗日数が長く葉齢の進んだ老化苗を植えても、初期分けつの発生が少なく、出穂期が早まる傾向が見られます！

2 育苗器材や育苗ハウスの準備

育苗箱・育苗器材			育苗ハウス
・育苗箱等は使用する前にイチバンで消毒する。 (※廃液を川・用水路に流さない)	資材名	希釈倍率	・ハウス内は事前に雑草を刈払い、均平にする。 (床が凸凹だと部分的に水が溜まり、病害の発生が助長される) ・ハウスの周りには、必ず排水溝を掘り、置床がよく乾くようにする。
	イチバン	500～1,000倍	

3 コシヒカリ(5月15日に田植えの場合)の育苗作業スケジュール(前編)

月日	作業	温度管理	作業管理のポイント									
4/15	比重選 ↓ 水洗 ↓ 袋詰		① <u>比重選で充実の悪い粃等を除去</u> ・硫安は良く溶かしてから使う。 ・比重選後の種粃は十分水洗いし、袋にぎっしり詰めこまない。 ※消毒済み種子を使用する場合は、比重選を行わず、 <u>浸種作業からスタート</u> する。									
			【比重液の作り方(水10ℓの場合)】 <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>比重</th> <th>硫安</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>うるち</td> <td>1.13</td> <td>2.5kg</td> </tr> <tr> <td>糯・酒米</td> <td>1.08</td> <td>1.5kg</td> </tr> </tbody> </table>		比重	硫安	うるち	1.13	2.5kg	糯・酒米	1.08	1.5kg
	比重	硫安										
うるち	1.13	2.5kg										
糯・酒米	1.08	1.5kg										
4/15	種子消毒	水温 10℃以上 を確保	② <u>種子消毒を徹底し病害の発生を予防</u> ・モミガードC水和剤の200倍液で24時間浸漬する。 ・効果ムラがでないよう、消毒中に袋を2～3回攪拌する。 ・消毒後は水洗いせずに浸種作業に入る。 (注:廃液を川や用水路に流さない)									
			【種粃に対する薬剤量の目安】 <table border="1"> <thead> <tr> <th>種粃量</th> <th>水</th> <th>薬剤</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>10kg</td> <td>20 ℓ</td> <td>100g</td> </tr> <tr> <td>30kg</td> <td>60 ℓ</td> <td>300g</td> </tr> </tbody> </table> 希釈倍率:200倍	種粃量	水	薬剤	10kg	20 ℓ	100g	30kg	60 ℓ	300g
種粃量	水	薬剤										
10kg	20 ℓ	100g										
30kg	60 ℓ	300g										
4/16	浸種	水温 10～15℃ を確保 (積算温度 (水温×日数) 100～120℃)	③ <u>浸種は積算温度を十分に確保</u> ・水温10～15℃を確保し、 <u>積算温度100～120℃を目安に浸種</u> を行う。特に浸種開始日は、 <u>水温が12℃となるよう心掛ける</u> 。 ・浸種桶は日光が直接当たらない場所(日かげ等)に置くとともに温度計を入れて、定期的な水温確認に努める。 ・酸素不足を防ぐため、2日に1回程度の割合で水を交換する。(ただし、消毒済み種子を使用する場合は、 <u>種子消毒効果を高めるため、浸種開始後3日間は水を交換しない</u>) ・水温が高くなり芽が伸びる恐れがある場合は、冷たい水に浸ける。									
			【浸種の主な効果】 ○発芽に必要な水分の吸収 ○発芽阻害物質の除去 ○発芽の揃いを良くする									
※冷たい水に長く漬けるのではなく、適温の水に7～10日しっかり漬けて積算気温を確保しましょう！												
4/24	催芽 (育苗器) 30℃で 24時間 程度		④ <u>芽の長さをこまめにチェック!</u> ・催芽の程度は、 <u>ハトムネ～芽長2mm程度</u> (右図)。 ・育苗器を使う場合、袋にたくさんの種粃を入れすぎず、1日2～3回程度上下段を入れ替えたり、袋を裏返すなどムラなく芽出をさせる。 ・均一に播種するため、種粃の水切り(脱水)は十分に行う。 (粃が手につかない程度まで陰干しを行う) ※ <u>循環式催芽器(ハト胸催芽器)は使用しない</u> (細菌性病害発生防止)。 (ただし、温湯消毒の体系処理(催芽時に食酢浸種処理)を行う場合を除く。)									
			【適切な芽の長さ】 									